

音楽による地域文化の革新

——宮城学院音楽科同窓生のライフコース分析——

片 瀬 一 男
相 澤 出
遠 藤 恵 子

キーワード：ピアノ，ライフヒストリー，キリスト教，女子教育，西洋音楽

はじめに

本稿は、戦後の東北地方の地域文化の変化に対して、女子ミッション教育を受けた人々と、彼女らを育てたミッションスクールが与えた影響を明らかにし、その社会的意義について考察するものである。具体的には、宮城学院音楽科同窓生のライフヒストリーの検討を通して、そこで学んだ者が、戦後の東北地方の地域の文化にもたらした革新を明らかにすることを目的とする。焦点となるのは、東北地方の近現代における音楽の経験である¹⁾。

近現代の日本の地方における西洋音楽の経験については、学校における音楽教育、すなわち文部省が指導した唱歌中心の音楽をめぐる研究が積み重ねられてきた。しかし、主流ではなかったものの、こうした公教育としての音楽教育と、それによる西洋音楽受容とは一線を画するところもまた、同じ時代に並行して存在した。それが女子ミッション教育の場で行われた音楽教育であり、そこを経由した西洋音楽とその文化の受容であった²⁾。

以下、本稿では、日本の近現代における西洋音楽の受容の歴史を概観し、その上で女子ミッション教育と、そこでの音楽教育を受けた女性のライフヒストリーを検討し、その社会的・文化的な独自性を提示する³⁾。これによって、地域社会に音楽の新しい経験と文化をもたらしたミッション系女子教育機関で学んだ戦前の音楽家の特徴を描き出すことができる。いいかえれば、音楽をめぐる新しい文化をもたらした地域文化の革新者の姿とその特徴、そして彼女らが地域にもたらした文化的革新の実態に迫ろうとするものである。本稿は話者の主観的な体験、ライフストーリーの記述に重点を置いたライフヒストリー（生活史）研究を方法とする（有末 2012）。この方法を採用ることにより、公文書など文字資料に記されていない、その時代、その社会の微細な部分、とりわけ同時代を生きた人々の体験にアプローチできる。この作業によって、戦前の公教育の一環としての音楽教育が代表していたものとは異なる西洋音楽の文化的な発信地であったミッション系女子教育機関の場と、そこでの音楽の体験の詳細の把握も期待できる。つまり、地方に西洋音楽とその文化をもたらした音楽家たちを育んだ場の特徴の解明の一助にもなると考える。

これまで革新（イノベーション）など創造性の発揮は、個人の資質に還元されて説明されがちであった。しかし近年、個人の創造性の発揮のなかの社会性に注目する視点も登場している（松田 2021）。さらにイノベーションに関しても、「技術革新」のような、それまで存在しなかったものの創造と解されがちであるが、J. シュンペーター（J. A. Schumpeter）は、それ以外の革新のあり方についても論じている。すなわち、それは既存の秩序になかったところに、新たな結びつきが創出されるという新結合であり、これもまた革新のあり方の一つである（Schumpeter 1926=1977）。

こうした視点を活かしたとき、本稿は、一人の音楽家のライフヒストリーから、女子ミッション教育の場が近代日本の地方における音楽と生活をめぐ

る文化に対して有した社会的・文化的意義について考察するものともなる。すなわち、ミッション系女子教育機関のなかで育まれた音楽と文化が、東北地方の地域との接点が生じたとき、いかなる変化が生じたかを考えることにもなるのである。

1. 戦前の日本における西洋音楽の受容と展開

明治期以降、日本は西洋に追いつくために、欧米の進んだ科学的知識・技術を学校教育によって取り入れていくことで、急激な近代化を推し進めた。このことは、科学的知識だけでなく文化（音楽や美術など芸術）の分野にもみられた。近代日本の洋楽教育は、1872年（明治5年）の「学制」における「唱歌」「奏楽」として始まったが、当時の日本には、西洋音楽の楽譜を読んで「唱歌」を指導できる教員もいなければ、小学校や中学校に「奏楽」のための楽器（オルガンやピアノ）が揃っていなかったため、「学制」でも「当分之ヲ欠ク」となっていた。また、1907年（明治40年）の「改正小学生令」でも、附則には「唱歌ハ… 当分ノ内、之ヲ闕クコトヲ得」となっていた、という（須田 2020: 23-5）。

さらに「唱歌」も、学校行事や祝日大祭のときに歌われる儀式用の楽曲であったり、1900年（明治33年）の「地理教育鉄道唱歌」（「鉄道唱歌」）のように、地理など他の教科の「教材」の位置づけで、「芸術」として認識されていなかった、とされる。日本において「音楽」が純粋に「芸術」として認識されるようになったのは、大正期の童謡運動であったともいわれる（渡辺 2010: 39-40）。また、明治期には西洋音楽を作曲できる日本人は限られていたために、西洋の民謡の「替え歌」であった（渡辺 2010）。これに加えてこの時期には、教会やミッションスクールにおける讃美歌の導入が、地方への洋楽（オルガン演奏や合唱など）の受容に影響していたことは、北原かな子（2020）の研究によって明らかにされている⁴⁾。したがって、日本に

における西洋文化の受容を検討する際、ミッション教育の影響に関する研究においては、宗教教育、英語教育に加えて、音楽教育も重要なテーマとなる。

前述のように、大正期から昭和初期にかけて、西洋音楽は演奏会などに参加した知識人（学生も含む）をつうじて「芸術」として受容されていった。加藤善子（2000）によれば、当時の西洋音楽の愛好者は、親が経済的に豊かな実業家など上層階層に属し、西洋文化と関連した職業をもっていて、本人の学歴も高い「洋風二代目インテリ層」によって担われていたという。そこには華族身分や「旧中産階級（自営業層）」も含まれ、比較的上層の出身者が多かったという。また、一部の文学者も西洋音楽を愛好し、その作品の中で音楽を裕福な者の趣味として描き出しているという。しかし、音楽作品は受け手によって多様な解釈がなされ、受け手の音楽への態度や消費の仕方や、また受け手の層の時代的变化によっても、その意味づけは異なるものであるから、西洋音楽の嗜好は階層と一对一の対応関係をもつものではないという（加藤 2000: 131）。

さらに、大正期から昭和初期には、ラジオやレコードの普及により、ジャズなどの大衆的な洋楽の受容も始まった。また、大正期には北原白秋や山田耕作らによる「童謡運動」によって「音楽」の芸術性が改めて認識されるようになった（渡辺 2010: 39-40）。この時期には「郷土教育運動」も隆盛し、学校の校歌が「郷土の歌」として位置づけられるようになった（加藤 2000: 133）。校歌を歌う者が児童・生徒だけではなく、卒業生など地域住民も含み込むことで、校歌はその地域社会における共同体意識の醸成の機能を果たすことになった、とされる（須田 2020: 138-51）。こうしたなかで、地方の中産階級からもレコードで音楽に親しんだ層からも大衆的な楽曲の作曲家も現れはじめた。

2. 女子ミッション教育の場での音楽教育と西洋音楽の体験： 宮城高等女学校で学んだ S さんのライフヒストリーから

2.1. 宮城高等女学校入学以前

以上、戦前における、主に公教育を通じた西洋音楽受容について概観した。これに対してここからは、このような受容の主たる経路とは異なるものとして、地方での音楽教育の様相の詳細を、女子ミッション教育を受けた一人の女性のライフヒストリーに即して明らかにしていく。具体的には、宮城学院音楽科卒業生の一人の談話を、本人の主観的な捉え方や感じ方(ライフストーリー)も含めて検討する。以下で検討する S さんは 1923 年生まれ(インタビュー当時、93 歳)、仙台生まれ仙台育ちの卒業生である。宮城学院(戦前の「宮城女学校(在学中に宮城高等女学校と改称され、以下では宮城高女と略称する)」時代)の音楽科を戦間期に卒業しており、その談話は戦前の公教育のものとは異なる西洋文化とその音の経験を教えてくれる貴重なものである。さらには卒業後のライフヒストリー、とくに東北の地方都市でのピアノ教師としての物語は、戦後日本の地方におけるピアノ文化の展開について示唆に富むものである。

まず S さんの宮城女学校入学前のライフヒストリーを見ていく。生家は仙台市内に複数の土地や借家を所有し、経済的に恵まれていた。S さんは 8 歳の頃からピアノの個人教授を受けており、ピアノとの接触は同時代の人々と比べて早く、しかも本格的であった。旧制二高の教授夫人(東京音楽学校を卒業)の個人教授を受けており、ここでピアノを基礎から学んでいる。その後、宮城県第一高等女学校に学び、卒業している⁵⁾。

「ピアノを 8 歳の時から個人教授について基礎から学ばせていただきました。いろいろ考えて。せっかくそれまでやってたんだから、それを活かして独り立ちできるよ

うに。その頃、日支戦争、事変といわれて、それで随分、未亡人が帰ってきて、女学校の時に。親たちは秘匿されて子どもを育てるのに苦勞したと周りでそういうお話を聞いて、何となく、女の人も何かもっていないと、未亡人になった時、困るなんて、そんなことを考えたんですね。それで、そうすれば、やっぱり何かに役に立つだろうなと思って。」

宮城女学校の音楽科への進学理由は、将来の自立を視野に入れたものであった。子どもの頃から学び続けてきたピアノを活かして自立できるようにと考えての選択であった。Sさんの人生に対する自律性もうかがえるが、同時に、当時の時代状況が自律性の発揮を迫る厳しいものであったことも確認される。当時、日中戦争が激化しており、若い女性も人生の危機を意識せざるを得ない状況であったことがうかがわれる。戦死者の増加とそれによる未亡人の増加、そうした女性たちの苦勞はSさんの耳にも伝わり、強く意識されていた。Sさんは戦時下という切迫した状況のなかで、男性に頼ることなく生きることを可能にするために音楽を活かそうとした。

もちろん、そうした危機感だけで宮城女学校を選んだわけでもない。県立の高等女学校にはない「すてきでハイカラ」な宮城女学校への憧れもあった。

「本当に違いましたね。ええ、でもやっぱり宮城女学校ってとても制服からすてきで、ハイカラで。それであこがれておりましたね。よくクリスマスの頃はというと、英文科と音楽科の方たちの劇、英語劇があって、それでイエス様のお話とかの劇があったり。それを毎年聞きに行って。あの、大講堂なんかもすばらしかったし。音楽が何でも素敵だったので、あこがれをもっていたのでね。」

戦前の東北で、キリスト教主義の教育を行う学校は少なかった。そのような東北地方にあって、宮城女学校は女子生徒にとって魅力的な、憧れの対象

であったことがうかがえる。おしゃれな制服、美しい西洋建築の校舎、公立の学校にはない行事は、いわば東北地方の若い女性にとって、身近にあって体感できる希少な西洋文化の園であったといえよう。

もちろん、他にも宮城女学校を選択せざるを得ない事情があった。「戦争が始まったから、うちでは東京に出せないとなって、どうしようかなと迷ったんですけど、宮城女学校の音楽科のお話を聞いて、ああ、それなら自宅か通えるから」と、宮城女学校を進学先として選んだという⁶⁾。宮城女学校への進学に、家族からの反対はなかった。Sさんの父はキリスト教徒ではなかったが、宗教に深い関心を持ち、仏教研究もしており、インドやタイにも研究のため数ヶ月ほど訪れていたという人物であった。姉がミッション系の学校に進学をしようとしたとき、母は反対したが、「父は宗教は個人のもので家のものとは関係ないから、個人で選んでかまわないというので許してくれた」という。そのような父親がいた家庭であったため、Sさんの姉二人も県立の学校から尚絅女学校（一人は英文科、一人は家政科）へと進学していた。ただしSさんの進路の選択時には、違う理由で母は難色を示し、家政科を勧めた。「母がね、音楽の学校に行くということを、なんか昔はこう、不良少女になる、そんなふうな時代だったんですね・・・（中略）・・・家からは離せない、やっぱり女は家政科を出て結婚した方がいい」との思いがあったようで、実家から通えるということで了解を得られたと話す。こうしてSさんは宮城高女の音楽科に進学する。

2.2. 宮城女学校入学後の経験：音楽とキリスト教

宮城女学校に進学したSさんは、ここでハンセン（Hansen, Kate I.）博士と出会う。ハンセン博士は、宮城学院女子大学キャンパス内の「ハンセン記念ホール」にその名を残し、宮城学院の歴史に多大な功績を刻んだ人物として知られている⁷⁾。15人の学生のなかで、ハンセン博士の受け持ちの学生

は3人であった。Sさんはその3人のうちの1人であった。Sさんは戦前・戦後の宮城学院の音楽教育を支えた名教師の教えを直接受けるという貴重な経験をもつこととなった。

ハンセン博士のレッスンは、ピアノの技法にとどまるものではなかった。

「いつも聖書の勉強をしないとされたんですね。西洋音楽を学ぶのに、キリスト教を分かなければ、分からないだろうということで。バッハの音楽でもなんでも、キリストのためにつくられた音楽だから、神をあがめるための音楽だから。」

ハンセン博士の教えは、キリスト教の理解を深めることの意義を強調するものでもあった。西洋音楽を学ぶとき、その文化的基盤であるキリスト教の理解なくして、音楽に対する理解は深まらないという教えである。さらにハンセン博士のレッスンは、教科書などもすべて英語であった。音楽科の授業であっても、英語の学習も欠かせなかった。そのためSさんも、音楽科の学生であっても、英語の学習にかなりの時間を費やすこととなった。Sさんにとってハンセン博士のレッスンは音楽・文化・言語にわたるものであり、狭義の音楽の学習にとどまらない、包括的な西洋文化の体験的な学びであった。

しかし、ハンセン博士のレッスンはSさんの卒業までは続かなかった。というのも、1941年、アジア・太平洋戦争が始まったために、ハンセン博士はアメリカに帰国してしまったからである。Sさんのピアノのレッスン担当は、日本人教員のK先生に引き継がれることとなった。

こうして音楽を通じて本格的にキリスト教にふれることになったSさんであったが、キリスト教への関心を深める大きなきっかけは、別な形でおとずれた。それはSさんが2年生の時、宮城高女に外部から講師として招聘されたK先生の講演であった。

「下のお名前は忘れたんですが、K先生という方がいらして、2年生の時、それで、今まで聖書の時間もいろいろあったのに、こう本当に気持ちを入れてお聞きしたことはないのに、その、K先生の「キリストの愛」についてのお話だったんですね。その時、もう、なぜか、何がどう感動したのか分からないけど、とにかく涙が出て、本当に、あのハンカチがぐしょぐしょになるくらい、とまらないくらい涙が出て、感動してしまったんですね。それから、ああ、それじゃあ教会に行ってみようと。それが2年生の時でしたね。2年生の10月ぐらいだったでしょうかね。」

この講演がきっかけとなり、Sさんはキリスト教に深い関心を懷くようになる。3年生まで自発的に教会に通い、さらに音楽でも関わるようになった。ハンセン博士に代わってレッスンを担当したK先生は、当時、仙台市内の教会のオルガニストもしていた。K先生の都合がつかない時には、Sさんなど音楽科の学生たちが、オルガンを演奏した。そしてSさんは、宮城高女卒業後、洗礼を受けた。1942年、19歳のクリスマスの時であった。

このようにSさんにとって宮城学院は、文化としての西洋音楽と信仰上でのキリスト教の受容をもたらした。Sさんにとって宮城学院での学びは、音楽と宗教が密接に結びついたものであった。これは当時の宮城学院ひいてはミッション系女子教育機関における音楽の経験と、地方における周囲の西洋音楽の経験との大きな違いをうかがわせる。戦時下でもあり、地方においてミッション系女子教育機関は、文化的に周縁的存在であった。しかし見方を変えれば、そこには当時の日本の地方では経験しがたい西洋の文化・音楽の体験があったともいえる。そうした、地方のミッション系女子教育機関においてのみ可能であった西洋文化と音楽の体験の諸相を、Sさんの談話は伝えてくれている。

2.3. 戦時下の宮城高女での西洋文化の体感の記憶

以前に、別稿（片瀬・相澤・遠藤 2020）においても確認されたことであるが、宮城学院という場の体験は、卒業生のライフストーリーのなかで忘れ難く、強い印象のあるものとして語られていた。仙台生まれのSさんにとって、宮城女学校のクリスマスは、入学前から楽しみにして、毎年訪れていた年中行事であった。このときばかりは学校関係者以外の地域住民が、宮城女学校のなかをかいま見ることができた。そこには建築にはじまり、服装、音、キリスト教に関する英語劇などの学内と行事の様子など、当時地方でふれる機会が乏しかった、体感できる本格的な西洋文化の姿があった。

入学すると、Sさんは外部からの客としてではなく、生徒としてそこで学び、狭義の音楽しかも公立の学校や地域の音の世界とは異なるキリスト教文化としての音楽を包括的に体験していく。Sさんが在籍した期間は、戦時色が色濃くなっていき、やがてアジア・太平洋戦争が始まり、戦火が激しくなっていく時期であった。日本の戦時下でのミッション系女子教育機関が置かれた苦境は、同じく宮城高女も直面したものであった。仙台という地方都市にあって、アメリカ人教師が多数在職し、しかもキリスト教主義の教育を行っている宮城高女に在籍していた当時の生徒たちが、周囲と相当の違和感を覚え、緊張を感じていたことは容易に想像される。「チェックされていたでしょうね、キリスト教の学校だから」とSさんは当時を振り返った。

「学校に特高（筆者注：特別高等警察）というのがきてました。宮城の園内を、背広を着て、見たことのない方が歩いているなあ、というのをよく思っていたんですけどね。東北大から先生方がよくいらっしゃるけど、その先生たちと全然違う方が、時々歩いている。」

キャンパス内が監視されていただけではなく。校内の行事にも介入があっ

た。Sさんが2年生の頃になると、行事にも外部から制限がかかるようになった。「校内リサイタルというのがあったんです。あの、各学年のね。その時のプログラムは特高が、敵国の作曲者が入っていないかどうか、チェックしていたそうです」というように、校内リサイタルのプログラムにまで特高警察によるチェックがあり、それに従わなければ行事もできない状態であった。宮城高女が国家から監視される対象であったことがよくわかる。

「クリスマスは戦時中だから、あんまり外に向けてはやらなかったかもしれませんね。びっくりしたから。ああ、すごいなって思ったから。黒の紋付きで、みんなで並んでね。ハレルヤコーラス歌ったりした。2年生の時には、もうできませんでしたね。戦争だったので。簡単にクリスマスの礼拝はするぐらいだったと思いますね。」

外部からの監視や介入はあっても、校内のリサイタルやクリスマスの行事は、細々とではあるが続けられた。注目したいのは、入学した頃のSさんの体験談に、戦時色が濃くなる以前の宮城高女の雰囲気がかがわれるものが含まれていたことである。

「宮城は本当に違いましたね。ええ、そうそう、私たちも黒の紋付きに袴をはいてコーラスしたんですよ。ハレルヤとかね。あの時はクリーテ先生の娘さんだったかな、ハンセン先生だったかな、指揮は忘れましたけど、音楽科全員でね。」

クリスマスという宮城高女にとって大切な日に、学生がそろって晴れ着を着て、ハレルヤのコーラスをするという経験は、当時、地方では得がたいものであったことは想像に難くない。もちろんコーラスだけではなく、前述した行事が、講堂を中心とした場の中で行われた。Sさんたち当時の生徒は、外国人教師たちとともにそれらを企画し、参加している。こうした宮城女学

校ならではの体験とその集合的記憶は、Sさんだけでなく、戦前の同窓生たちが共有するものであったであろう。

Sさんをはじめ、戦前の宮城学院に在学した生徒たちの体験とその記憶の核にあったのは、西洋文化（宮城学院の場合、より精確に言えば、自立した女性であるアメリカ人女性宣教師が土台を築き、その後も外国人教師を中心としながら育まれた、福音主義キリスト教にもとづく教育文化）の包括的な体験であった。こうした体験をSさんも宮城学院の同窓生たちも誇りに思い、ボランティアという形で社会に貢献することに使命を感じ、主体性を発揮していた。さらにこの使命感は、その子や孫にまで引き継がれるケースが見出された（片瀬・相澤・遠藤 2020）。このようなミッション系女子教育機関での西洋文化の包括的な体験は、これまで戦前の女子教育研究などで論究されてきた教養の男女間の差異とも異なる様相を示す。

先行研究（稲垣 2007）が示す知見と比較するならば、男性の教養文化が、主として書籍を介した知識の蓄積に重点が置かれたものであったのに対して、宮城学院の女子学生たちの教養文化は書籍だけでなく、キリスト教・言語・音楽さらには外国人教師との交流、西洋の生活様式などの体験によって媒介されたものであったことがうかがわれる。さらに付け加えるならば、男性側の教養の場合、ドイツ文学などに代表されるドイツ語圏のものの存在感が大きい（高田 2005, 2006）。それに対して女子ミッション教育の場で体験される西洋文化は、それぞれの学校の背景にある教派と関わりが深い文化の色彩が強い。宮城学院の場合、アメリカの文化（より精確に言えばそのなかでも、20世紀初頭のアメリカ社会で、自立して活躍した女性によって代表されていた部分）である⁸⁾。

女性側の教養については、公立の女学校において教科教育などで教授される知識に傾斜した「学校型教養志向」や学校外での茶華道・ピアノなど稽古事に傾斜した「たしなみ教養志向」の違いに注目した研究（貫田 2007）

などがある。こうした公立の女学校の世界と比べたとき、ミッション系女子教育機関に見られる教養について、稲垣恭子は宮城女学校のケースも踏まえつつ「生きられる知識 'to live' という願望が前にあって、それがフィットした生き方」につながるものとして捉え、その教養のあり方の現代的意義を評価している(稲垣 2019: 12)。本稿が稲垣の示す知見に付け加えるところは、教科教育や読書を通じて得られるものと、音楽など嗜まれるものとの、キリスト教主義教育の理念を核として有機的に結びついており、それらが西洋文化を体感できる場で体得されている、という点である。そして、稲垣が述べるように、そこで得られたものは卒業後の人生の支えとなっている。S さんの事例でも、宮城学院で学び、触れたものが、人生の支えとなっている。

2.4. 宮城高女卒業後：地方にもたらされた新しい音の経験

戦争が激化するなか、S さんは宮城高女を卒業した。卒業後は仙台市内の女学校（宮城高女ではない）で、音楽の教師として3年ほど勤務している⁹⁾。とはいえ、この時期になると勤務先の女学校内にも学校工場が設けられたり、S さんと受け持った生徒たちとともに、仙台市内の、少年航空兵などが訓練をしていた近隣の軍用飛行場の補修工事に「もっこを担いで、砂とか土とか運んで、（飛行場にあいた穴や水たまりを）埋め」などの作業に動員されてもいる。すでに父親は亡くなっており、二人の姉の夫はどちらも医師であったが、両者とも戦地に赴いていた。実家には母親、姉二人、S さん、妹、姉の子どもたちと大勢おり、「家計はずいぶん大変でしたね」と、家族全員が食べていく上での苦労を振り返っておられた。S さんは自身の生活費に当たる分を教師として稼ぐことはできていたものの、実家の暮らし全体となると、父親が遺した土地や持ち物を手放さざるをえない状況であった。

その後、戦争が終わり、ほどなくして秋田市の開業医の医師との縁談が来た。このとき S さんは、相手の家が仏教であったため宗教の違いに悩み、

洗礼も受けていたため一旦は断った。しかし、相手側が「それは関係ないから、ただ、お盆とかお彼岸の時に公墓参りしてくれるかということで、確認をもらっ」た上に、Sさんが教会に通うことも認めることでSさんの信仰に理解を示したので結婚を決め、秋田に嫁ぐことになった。嫁ぎ先の秋田市でも教会に通い、そこでオルガニストとして奉仕もするようになった。インタビュー当時も、教会のオルガニストとしての奉仕を続けており、ここからも、Sさんにとって信仰と音楽が人生にとって大きな部分を占め続けてきたことがうかがわれた。

秋田での生活が始まったSさんであるが、自らの人生だけでなく、地域にも影響を与えることにつながる出来事が起きた。結婚して2年ほどしてから、夫の友人の音楽仲間から依頼があった。Sさんの夫は大の音楽好きで、自らもコントラバスなど楽器を演奏するほどであった。夫婦ともに音楽を愛好していたわけであるが、夫の友人にも音楽好きの人が多く、コーラスを仲間楽しんでたという。Sさんもそこに関わっていたのだが、その音楽仲間から、子どもにピアノを教えてほしいとの依頼があった。

「ピアノを教えてください、と。うちでやっていたものですから、そんな集まりをやっていた関係で、子どもさんのいる方とか、ご自分で歌っている人たちでもね、ピアノを教えてくださいとかって言うので。ピアノを教えてくださいと。すぐこう集まってね。」

これがきっかけとなり、Sさんは戦後直後の秋田市内でピアノ教室を始めることとなった。Sさんによれば、これは1948～49年頃の出来事であり、秋田市で最も早い時期に始まったピアノ教室となった。まだ戦後直後で、秋田市内に存在するピアノはごくわずかという時期である¹⁰⁾。そもそもピアノは高価で、特に地方では希少な楽器であった。しかも練習を欠かすことがで

きないという特徴もあるという。地方では都市部であっても、希少なピアノにふれ、しかも嗜む能力を養う機会はそれほどなかった。ピアノの本格的な普及は高度経済成長が始まり、その担い手となった中間層の拡大を待たねばならなかった（高橋 2001）。そうした時代の到来前に、Sさんのピアノ教室は始まっている。

「生徒さんが10人くらい集まってから、初めて発表会をやって。女声合唱団も入って、女声合唱団をメインにして、私のピアノの生徒さんたち、まだ本当にバイエル級の人たちの発表会をして。そういうのをやったの、民間の人では初めてだったと思います、戦後。」

このSさんのピアノ教室の演奏会も、戦後の秋田市でおそらく初めてのものであった。秋田市内でピアノがあるのは、県民会館や大学などごくわずかな場所に限られていた頃であり、地方でのピアノ文化の展開という点でも注目される。こうした新しい音楽文化を、演奏会という形で地域に自発的に発信している点でも、注目すべき民間の新しい活動であった。

その後、1950年代後半には、全国的に地方にもピアノが普及し始める。その普及については、ヤマハやカワイといった企業によるピアノ教室の全国展開があったことはよく知られている（高橋 2001）。こうした企業によるピアノ教室の全国展開に先んじてピアノ文化の地域への導入があったこと、そしてその文化の担い手が、ミッション系教育を受けた女性であったことは注目に値する¹¹⁾。Sさんの教室でも多くの子どもたちが学び、多数の生徒を輩出することになる。そのなかには将来、Sさんと活動を共にする音楽家たちも含まれていた¹²⁾。

2.5. 社会での活動とそこに息づくエートス

インタビュー当時、Sさんは90代であったが、社会的にも活躍していた。ピアノ教室について話を聞いたなかで、音楽を活かした多様なボランティア活動に積極的に参加する様子もうかがわれた。それは秋田県内在住の音楽家が参加する「おんぷの会」の活動である。県内でも音楽があまり盛んでなかった地域に出張し、演奏会を開催するなどしており、ここにはSさんの教室で学んだ音楽家たちもメンバーとして関わっている。「おんぷの会」の社会貢献活動としては、前述の演奏会の他にも、老人ホームや施設での慰問の演奏がある。さらに東日本大震災後には、被災地の支援活動（被災地におけるボランティアでの演奏）も行っており、Sさんもこれに、かつての生徒たちとともに参加していた。

これらの社会貢献活動は、伝統的な地域活動とは異なるものである。すなわち、活動自体の新しさはもちろん、血縁や地縁による共同体を超えた普遍主義的な志向が見出される。さらにこのボランティア活動が、ピアノ教室のかつての生徒や志を共有する音楽家たちの“つながり”による、アソシエーション的な関係性のなかで行われていることに注目したい¹³⁾。以前、戦後の宮城学院同窓生のライフヒストリーを検討した時もそうであったが、新しい活動への積極的関与、高齢でも活動的であること、ボランティアへの志向、ネットワーク的な活動、普遍主義的なエートスが特徴として見出された（片瀬・相澤・遠藤 2020）¹⁴⁾。ネットワークという点では、Sさんが同窓会の活動にも貢献されていたこと、そして何よりピアノ教室の出発点が、アソシエーション的なつながりから生じたものであったことも忘れられてはならない。戦後の地方において生じた文化の革新が、アソシエーション的な関係性とそのネットワークによってもたらされていた様子がうかがえる。

談話はSさんの家庭のことにも及んだ。Sさんは家庭では3人の娘の母でもある。その3人のお子さんについて話すなかで、「娘たちも孫たちも教

会学校には連れて行っていたのに、後が続かなかったのが、ほんとにね、なんか残念なんですけど」と話しておられた。しかし、その談話からは、3人の娘がいずれも自立した女性であり、それぞれの分野で社会的に活躍し、しかも社会貢献への強い関心を持っていること、国際的な感覚の持ち主であることも、談話からうかがわれた。前述した普遍主義的志向、自立し行動的である女性の生き方、ボランティアへの関心の高さ、国際的な感覚などは、母であるSさんが学んだ宮城学院にまで遡るものと考えることができるものである。キリスト教の信徒にはならなかったものの、Sさんが身に付けてきた宮城学院のキリスト教主義のエートスは、世俗化され、非宗教的なかたちになってはいるものの、子どもたちやピアノ教室の教え子たちなど周囲の人々に伝わっていると考えられる。

おわりに

以上、Sさんのライフヒストリーを検討してきた。Sさんのライフコースと、そこでの物語からうかがわれたのは、地方における戦後の学校教育や企業活動によるピアノ文化の普及以前に、すでに新しい文化の胎動が見られたということである。しかも、その新しい文化を地方に導入した担い手は、ミッション系女子教育の場で学んだ音楽の技法だけでなく、その音楽の背景にある文化、そしてエートスをも伝えていたということである。

さらにSさんのライフヒストリーは、戦前・戦中の日本において、社会的・文化的にマージナルな集団であったミッション系女子教育機関の世界で育まれた文化が、戦後の地方に新しい動きを生み出していたことも示唆していた。本稿では音楽がテーマとなったが、音楽に限らず多方面にわたり、ミッション系女子教育機関が戦後の地方の文化の革新に影響を与えたであろうことも推測できる。今後は、ミッション系女子教育機関において西洋文化の包括的な体験と学びを経た女性たちが、他の領域でも戦後、地方においてユニー

クな影響を与えた可能性についても検討できるであろう¹⁵⁾。

謝辞および付記：話者のSさん、そしてSさんをご紹介くださいました宮城学院同窓会、天童睦子教授には、本研究にあたり、多大なるご理解とご協力を賜りました。この場をかりまして、心から御礼申し上げます。なお本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「東北地方における女子ミッション教育の戦後史」(研究代表：片瀬一男 課題番号 21K02245)による研究の一環である。

〈注〉

- 1) 本稿は片瀬が全体の監修および第1章を執筆、相澤がはじめに、第2章、おわりにを執筆、遠藤が全体の内容等のチェックを行っている。本稿のもとになるライフヒストリーの聴き取り調査は、遠藤がリーダーとして統括し、2016年から2017年にかけて実施された。本研究を実施するにあたり、日本社会学会倫理綱領およびそれにもとづく研究指針を踏まえている。Sさんのライフヒストリーについて論じた部分は、2023年度第1回 宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所 公開シンポジウム「音楽とリベラルアーツがつむぐ地域革新」での相澤報告(「音楽がつむぐ地域文化の革新：宮城学院同窓生のライフコース分析」)に加筆し、分析を加えたものである。
- 2) 地域における西洋音楽の体験的な受容に関して、特に本稿にとって重要な楽器であるピアノについては、ミッション系の学校が、希望者への課外授業という形で利用が開放されるなど、地域住民にとって希少な存在であったピアノに触れることができる数少ない場であったことが先行研究によって明らかにされている(齊藤 2018)。
- 3) 以前にも宮城学院同窓生のライフヒストリーを分析しており、本稿でも同じ方法を用いた(片瀬・相澤・遠藤 2020)。ライフヒストリーについては有末賢(2012)を参照。
- 4) 北原(2020)は、弘前を事例に中心に、讃美歌の受容によって西洋音楽(唱歌など)が導入される基礎が形成されていたと指摘する。それによると、1874年(明治7年)に横浜で受洗した旧弘前藩士・本多庸一が設立した弘前教会や、藩校の流れをくむ東奥義塾に招聘された宣教師(とくにJ. イング(Ing,

John) 夫妻) によって讃美歌がもちこまれ、それによって明治初期から他地域に先駆けて西洋音楽の音階やメロディ、リズムを聴き取る聴覚や感性が獲得されていたという。

- 5) 戦前・戦後にピアノを習った人々を対象とした調査研究(水野 2001)でも、ピアノ文化との接触を可能にした条件として、経済的に恵まれていることがあげられている。戦前においてピアノ文化の普及は限定的であり、その拡大は戦後の高度経済成長期を待たねばならなかった。戦後のピアノ文化の拡大については本間千尋(2012)を参照。
- 6) 入学前にも宮城学院のことは知っており、あこがれもあったが、進学先を選ぶ時点では「それまでは宗教のことは全然考えないで、はい」とSさんは話しておられた。Sさんのご実家は仏教であり、宮城学院に入ることによって「イエス様の詳しいお話とか、聖書の詳しいお話とか」にふれることとなった。キリスト教との「出会いというのは宮城学院に入ったおかげ」とSさんは感慨深く語っておられた。
- 7) ハンセン博士は1879年にアメリカのカンザス(Kansas)州で生まれた。大学で学んだ後、宣教師に任じられ、1907年に宮城学院に音楽教員として派遣されている。1930年に音楽博士号を授与されている(宮城学院七十年史編集委員会 1956, 宮城学院八十年小誌編集委員会 1966)。当時のアメリカ社会において高等教育を経験した女性であり、社会的に自立した女性であったことが分かる。初代校長のプールボー(Elizabeth R. Poorbaugh)以来、宮城学院においても、こうしたアメリカの女性教師という自立した女性は、戦前・戦後にわたってその存在感や影響力が大きい。戦前の地方におけるピアノの普及に関する研究でも、宮城女学校が戦前の仙台でピアノ普及の拠点であり、ハンセン博士をはじめとする外国人教師が果たした役割、その教育や活動が評価されている(坂本 1998)。
- 8) 小檜山ルイの一連の研究(小檜山 1992, 2013a, 2013b, 2018)が示唆するところであるが19世紀後半から20世紀初頭の時期、アメリカ社会で女性が社会に進出できる、かぎられた経路の一つが、当時の女性のなかでは相対的に高い教育を受けた後、宣教師になる道であった。宮城女学校初代校長のプールボーをはじめとする女性宣教師、教師は、まさにそうした時代のアメリカにあって、社会的に活動する道を選んだ自立した女性たちであった。見方を

音楽による地域文化の革新

変えれば、当時のアメリカ社会における女性一般がたどったライフコースとは異なる生き方を選んだ人々ともいえる。女性の自立した生き方といった点に着目すると、当時のアメリカ文化のどの部分が宮城学院の文化的土台となったのかも分かる。

- 9) Sさんは学校で音楽を教えただけでなく、放課後には個人教授をすることもあった。レッスンは学校のピアノを用いて行われたが、生徒の家にあるのはほとんどがオルガンであり、仙台でもピアノを所有する家庭は限られていたとのことである。
- 10) 同時期の他の地方都市においても状況は変わらなかった。戦後直後の耐乏生活と強烈な物価上昇のなかで、ピアノは購入困難なものであり、学校などに置かれたものしかなかったと言われている（榎 1969）。
- 11) 高度経済成長期の音楽教室の展開については本間（2012）を参照。なお本間（2012）はヤマハ音楽教室登場以前の音楽教室、具体的には戦後の東京や大阪といった大都市部の女学校や短大（いずれもミッション系ではない）の音楽部付属の音楽教室の存在にもふれている。
- 12) インタビュー当日もレッスンが予定されていた。ただし、生徒層には変化があり、近年では幼児教育を専攻する短大生で、進学前までピアノを習ったことがなく、専門の必要上、レッスンを受けるようになった初心者が多いとのことであった。
- 13) 戦後において血縁、地縁、伝統的共同体に基づくものではない、アソシエーション的な関係性やつきあいが、社会的に有した意義については天野正子（2005）を参照。
- 14) ここには T. パーソンズ（T. Parsons）が、ピューリタニズムに由来する、アメリカ社会に制度化された価値として「道具的活動主義」と概念化したものとの共通性が見て取れる。道具的活動主義とパーソンズのアメリカ社会論については高城和義（2002）を参照。
- 15) 本稿では地方での西洋音楽の受容においてミッション系女子教育機関が有した役割について検討したが、先行研究でも本稿でも取り上げられた事例はプロテスタント系の学校であった。これにはカトリック系の学校が女子教育に本格的に参入するのが 20 世紀初頭になってからであり、プロテスタント系の学校と比べて遅かったという歴史的経緯も関係する（小檜山 2016）。カト

リック系の学校が地方の西洋音楽受容に対して有した役割については、これから研究の進展が期待されるところである。

〈参考文献〉

- 天野正子, 2005, 『「つきあい」の戦後史—サークル・ネットワークの拓く地平』 吉川弘文館.
- 有末 賢, 2012, 『生活史宣言—ライフヒストリーの社会学』 慶應義塾大学出版会.
- 本間千尋, 2012, 「日本におけるピアノ文化の普及—高度経済成長期の大衆文化を中心として」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要—社会学心理学教育学』(74): 33-54.
- 稲垣恭子, 2007 『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化』 中央公論新社.
- , 2019, 「ミッション系女学校の教養」『宮城学院資料室年報—信 望 愛』(24): 9-22.
- 片瀬一男・相澤 出・遠藤恵子, 2020, 「戦後日本社会における女性たちの『もうひとつの』 個人主義—宮城学院同窓生の生活史の分析から」『キリスト教文化研究所研究年報：民族と宗教』(53): 37-59.
- 加藤善子, 2000, 「近代日本における西洋音楽の「聴衆」—西洋音楽は階級文化たりえたのか」『人間科学研究』2: 129-141.
- , 2003, 「「芸術」の概念をつくりだした学生たち—クラシック音楽の愛好スタイルからみる西洋文化の受容」『大学史研究』(19): 32-45.
- , 2005, 「クラシック音楽愛好家とは誰か」渡辺裕ほか編『クラシック音楽の政治学』 青弓社: 143-174.
- 北原かな子, 2020, 「明治初期弘前における洋楽受容と讃美歌」北原かな子・浪川健治『近代移行期における地域形成と音楽—創られる伝統と異文化接触』 ミネルヴァ書房: 204-239.
- 小檜山ルイ, 1992, 『アメリカ婦人宣教師—来日の背景とその影響』 東京大学出版会.
- , 2013a, 「アメリカ的帝国の形成と女子高等教育の越境」『キリスト教社会問題研究』62: 63-83.
- , 2013b, 「エリザベス・プールボーの日本体験」『歴史評論』(756): 5-22.

- , 2016, 「キリスト教に基づく近代日本の女子教育再考—その多様性と歴史的展開」キリスト教史学会編『近代日本のキリスト教と女子教育』教文館：11-17.
- , 2018, 「プロテスタント・キリスト教と近代日本のジェンダー・セクシュアリティ」『福音と世界』73 (1): 18-23.
- 松田素二 (編), 2021, 『集合的創造性—コンヴィヴィアルな人間学のために』世界思想社.
- 宮城学院七十年史編集委員会, 1956, 『宮城学院七十年史』宮城学院.
- 宮城学院八十年小誌編集委員会, 1966, 『宮城学院八十年小誌』宮城学院.
- 水野宏美, 2001, 「近代の家族生活とピアノ文化」『哲學』(106): 59-91.
- 貫田優子, 2007, 「高等女学校同窓生集団の文化と構造—京都府立京都第一高等女学校卒業生調査から」『京都大学大学院教育学研究科紀要』(53): 379-391.
- 齊藤紀子, 2018, 「ミッション系女学校におけるピアノの様々な役割—三木楽器並びにヴォーリズ建築のプール学院の資料をもとに」『人間文化創成科学論叢』21: 241-249.
- 榊 兵治, 1969, 「鳥取市におけるピアノ普及について—戦後から昭和43年に至るまでの、主として市街地を中心とした地域の実態調査とその考察」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』11(1): 31-50.
- 坂本麻実子, 1998, 「明治末期の地方ピアノ界とプロテスタント系女学校—仙台と広島事例から」『桐朋学園大学研究紀要』(24), 27-44.
- Schumpeter, J.A., 1926 *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung : eine Untersuchung über Unternehmergewinn, Kapital, Kredit, Zins und den Konjunkturzyklus*, 2.Aufl., Duncker & Humblot (=1977, 塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論 (上)』岩波書店).
- 須田珠生, 2020, 『校歌の誕生』人文書院.
- 高城和義, 2002, 『パーソンズ—医療社会学の構想』岩波書店.
- 高田理恵子, 2005, 『グロテスクな教養』筑摩書房.
- , 2006, 『文学部をめぐる病い—教養主義・ナチス・旧制高校』筑摩書房.
- 高橋一郎, 2001, 「家庭と階級文化—「中流文化」としてのピアノを巡って」柴野昌山編『文化伝達の社会学』世界思想社：156-175.
- 渡辺 裕, 2010, 『歌う国民—唱歌, 校歌, うたごえ』中央公論新社.